

第4回琵琶湖オオクチバス等防除モデル事業調査 検討会 議事要旨

日時：平成20年1月16日(水) 13:30~16:30

場所：滋賀県農業教育情報センター 1F 生活企画相談室

出席者：細谷委員(座長)、久保委員、中井委員、西野委員、松岡委員

滋賀県琵琶湖再生課(相本主事)、滋賀県水産試験場(田中主任主査、上垣主任技師)

事務局：環境省、(財)琵琶湖・淀川水質保全機構

議事内容：

■座長あいさつ

- 平成19年度調査結果中間報告として紹介いただく。来年度がモデル事業の最終年であり、重要な検討会である。

■資料-1(平成19年度調査と進捗状況)について

- 昨年度実施した冬季蝸集調査(彦根旧港湾等)の追試は実施しないのか。蝸集している個体をどう駆除するか。また、漁港を含めた蝸集場所での効率的な駆除方法の情報が必要ではないか。
- 昨年度の彦根旧港湾等の調査により、オオクチバス等の蝸集実態について、十分ではないかもしれないが概ね把握できたと考えている。

■資料-2(内湖における調査結果中間報告)について

- 事務局の説明にもあったが、野田沼でオオクチバスはあまり繁殖していないと思う。しかし、人工産卵床のセンサーが128回も反応しており、卵食い等により、産卵はしたが正常に発生しなかった可能性があるのではないか。伊豆沼における人工産卵床のセンサー誤差について聞いてはどうか。
- 人工産卵床のセンサーが128回反応した時期的特徴を調べれば、誤作動なのかどうかわかるのではないか。
- 刺網による産卵親魚捕獲について、三枚網と一枚網でオオクチバス、ブルーギルの取れ方が明らかに違う。これは漁業者からの情報に基づき実施したことが重要であり、次年度への提案につながる。
- 三枚網と一枚網でオオクチバス、ブルーギルの取れ方が異なるのは、魚の形の違いにもよるのではないか。オオクチバスは尖っているので一枚網に刺さりやすいのではないかと思う。
- 仔稚魚駆除について、仔稚魚調査の結果と比較するためにも外来魚以外の魚種について整理する必要がある。
- 仔稚魚調査と仔稚魚駆除では、採集された魚種の組成が異なる。将来仔稚魚を駆除するときには、在来魚の混獲を少なくする手法を検討していく必要がある。
- 魚類相調査の結果について、漁法別にブルーギルの採集量等を整理する必要がある。
- 伊豆沼のマニュアルはオオクチバスの駆除マニュアルでありブルーギルではない。ブルーギルに特化したマニュアルづくりをしていけばどうか。例えば、人工産卵床はギ

ルも利用することが他水域でもわかっているが、これが効果的なのかは不明である。

- ・ 野田沼における在来魚の推移をみると、外来魚の駆除効果があったものと思う。今後、どの段階（成長、産卵など）の駆除で効果があったのかを考えていく必要がある。
- ・ 仔稚魚調査の結果について 2002 年の調査と比較しているが、2003-2004 年についても近畿大学のデータがあるので比較すること。但し、本来の目指すべき野田沼の魚類相という情報がない。あるのは琵琶湖南湖の山の下湾（平井, 1970）であるが、これがコントロールになりうるのではないか。

■資料-3(琵琶湖における調査結果中間報告)について

- ・ 産卵場所の条件として、植生の有無を条件からはずしたとういことであるが、オオクチバス、ブルーギルとも明らかにヨシの根の上に産む。漁業者が目撃していないだけではないか。ヨシ帯を制限条件にしないという意味と思うが、ヨシ帯が重要でないのとらえられない書き方に改めること。
- ・ 今回の調査で旧志賀町沖では情報ないが、ここでもほぼ確実に産んでいる。ペアリングしているオオクチバスを目撃している。
- ・ 漁業者はあまり産卵床をみていない。一方、漁港内はよく見るだろう。滋賀県では水産試験場が作成した産卵マップに基づいてタモすくい事業(オオクチバス、ブルーギル仔稚魚駆除)を行った。タモすくいを実施した漁協は外来魚の繁殖に関心が高いのではないか。

■次年度調査について

- ・ 野田沼での移動調査結果を見ると、6月末に多くのブルーギルが野田沼に入ってきている。野田沼の外来魚駆除は効果があがっているが、琵琶湖からある一定の供給があるために、駆除を継続しなければならない。内湖は琵琶湖との魚の移動が必ずある。外来魚駆除の考え方として、内湖では①外来魚をある密度以下にする。②外からの侵入を食い止める。この2つがあるが、このうち②の問題をどうするかが最後まで残るのでないか。例えば国土交通省琵琶湖河川事務所が実施した研究（もぐり堰）等が活用できないか検討してはどうか。
- ・ 次年度、野田沼での調査を継続すべきかどうかとの質問が事務局よりあったが、野田沼において、外来魚の減少に伴い、今後も魚類相の変化が予想される。また、駆除について、在来種が増加したメカニズムや因果関係がまったく不明な状態でやめるべきではない。
- ・ 野田沼ではなく仮に乙女が池で駆除をしても 1 年間で現れる効果は限定的であると思われる。一方、野田沼についてはもう少し続けることで、次の提言がでてくる可能性がある。

■その他

- ・ 次回検討会について 3 月 5 日午後を実施したい。また詳細については後日連絡させていただく。

以上

（文責：近畿地方環境事務所）